

## ■ 書 評



近代精神医学史研究  
 一 東京大学・合衆国・外地の精神医学  
 風祭元 著  
 中央公論事業出版  
 2012年8月  
 204頁, 定価 2,940円

著者風祭元先生は2001年に松沢病院院長をご退官の後にも数多くの著作を発表されている。「松沢病院院長日記」「精神鑑定医の事件簿」「精神科医の雑学読書」「退官春秋—古希から喜寿まで」など。

このたび、敬愛する風祭元先生による「近代精神医学史研究」を拜読する機会に恵まれた。先生は1958年東大精神医学教室入局、1970年から米国ボストンのタフツ大学に留学、1972年から帝京大学精神科教授、そして1994年から松沢病院院長。我が国を代表する精神科医の重鎮である。第1章「松沢病院と日本精神医学・医療の歴史」、第2章「東京大学医学部精神医学教室の歴史」、第3章「アメリカ合衆国の公立精神病院の歴史」は、先生が実際に過ごされた施設での体験に基づいた記述であるだけに、正確であり、なるほどと納得できる記載に満ちている。「血の通った正確な記載」は風祭先生のいずれの著作にも共通して認められるのであるが、本書を読まれた年配の精神科医の中には、自分がかかわった精神医学・医療の体験を後世のために書き残しておくことに賛同される読者も多いのではなかろうか。書評者も2年後に自分の教室の120周年記念誌の刊行を予定しているが、記念誌の編集にあたっては本書のような記載をモデルとしたいと思っている。

第4章「太平洋戦争終結以前の東アジア植民地の精神医学」は、台湾・韓国・満州における精神

医学史が記述されている必読の部分である。精神科領域においても我が国から世界への発信が求められるようになり久しい。JYPOの活動を通じ日本精神神経学会による国際交流も活発になり、日本生物学的精神医学会、日本老年精神医学会では、台湾・韓国・香港との若手交流プログラムにより定期的な交流で成果をあげている。そのような国際交流の振興には、相手国の実情と歴史を知ることが必要であるが、本書には太平洋戦争終結以前の台湾、韓国、満州における精神医学・医療の歴史が、これも血の通った正確な記載でなされている。

書評者も精神医学領域における国際交流のために各国を訪問するが、数年前から台湾訪問時にはEng-Kng Yeh先生ご夫妻との歓談を楽しみにするようになった。Yeh先生は大正13年12月31日生まれの台湾精神医学の重鎮であり、1969年に台北市立精神医療センター(Taipei City Psychiatric Center; TCPC)を設立し台湾の精神医療モデルを作り上げた人である。TCPCは日本でいうと松沢病院に相当するのであろうが、Yeh先生の立案により、精神科医療センターは病床・外来、デイケア、ナイトケア、精神科救急の4つを要件として運営されるようになり、病院を中心としたメンタルヘルスシステムが作り上げられたという。本年10月の台湾訪問の折には本書を持参した。本書の台湾の記載はYeh先生から見ても「血の通った正確な記載」であり、本書により台湾の精神医学の歴史が日本の精神科医に知られるようになったことに感謝しておられた。もちろんYeh先生ご夫妻と風祭先生ご夫妻とは古くからのお付き合いであり、奥様同士では今でもメールのやり取りを続けられておられるとのことであった。Yeh先生の奥様、劉心心さんは、最近日本語での著作「海の向こう」「折々の記」の2冊を出版された。正統な日本語で書かれており、台湾人の感性と台湾の文化を知るための良書である。

(武田雅俊)